
報われないのはお互い様

怠惰なぼっち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

報われないのはお互い様

【Nコード】

N3826BA

【作者名】

怠惰なぼっち

【あらすじ】

注意！この小説には知的障害者の登場人物等が登場します。障害者差別、人としておかしい等を思う方の閲覧はご控えください。

第1話

「はぁ……」

中学校って案外面白くないんだな……

「どうしたんだよ？星河？」

「え？俺？」

「お前以外いないだろ……疲れてんのか？」

「そう……なんだろうな、ははっ」

「……あのさ、」

「どうした？急に声小さくして」

「……お前、雪乃さんと幼馴染なんだって？」

「……それがどうかしたか？」

「いいよなーあんな可愛い子がさー」

「そうか？」

「それに真面目そうだし、学級委員なんか自分から立候補したし」

「……まあな……」

やっぱアイツ、そういうイメージもたれてるのかな…

「後さ、お前の隣の席の大野さん可愛くね？」

「お前良く見てるなあ…」

「可愛い子には目が無いんでね」

「あつそ」

「何だよー」

キンコーンカーンコーン

丁度チャイムが鳴った。俺はこの時、あんな事に巻き込まれるとは思わなかった。

第2話

放課後、校舎裏に来てほしいと大野から言われ、俺は校舎裏に来た。
さっきいた明島に茶化されたが

スルーして校舎裏に来た。すると約束どおり大野がいた。

「何で俺を呼び出したんだ？」

「…今から言う事は、誰にも言わないでほしい。」

「…へ？」

「…私は、この時代の人間では無い。」

「…？」

「つまり、私は未来から来た。」

「未来…？どういうことだ？」

「私は未来から今の時代を変える為に来た。」

「…何故？」

「…あなたの親友の雪乃里奈は強大な力を持つ超能力者。」

「ちようのつ…りよくしゃ？」

「そう。私は未来の地球連邦政府の指令を受け雪乃里奈の護衛を依頼された。」

「…？」

「私達は10年後の世界から来た。その世界では地球侵略を目的とした異星人の前に降伏寸前まで追い詰められている。私は地球連邦政府の最後の指令でここに来た。」

「その…話がでかすぎて良く分かんないけど、つまり里奈の力があれば地球を救える…って事か？」

「ええ。」

「でも、10年後なんて里奈は普通に生きてるんじゃないのか？」

「…言い辛い話ですが、彼女は15歳の頃に死亡します。」

「…え…ウソだろ…？」

「嘘ではありません。彼女は残虐的な行為をされ続け、陵辱の限りを尽くされ、最後は自殺します。」

「ふざけんな！いくらなんでも…」

「私は未来から来ました。彼女のデータを研究した結果16歳の頃能力が覚醒、力を使えるようになります。それまではただ普通の中学生。そこであなたにお願いがある。」

「…何だ？」

「あなたには彼女を守ってもらいたい。」

「…はあ？別に未来から来たお前が…」

「…未来から来た人間は過去の人間への干渉は行えない。」

「…それで俺なのか？」

「そう。それにあなたは彼女に最も近い存在。」

「…」

「あなたは、明日から彼女を守るように。そしてこの話は他者に話してはならない。」

「…分かったよ、守れなんて前に言われたこともあったし、まあ大丈夫だ。」

「…私はあなたへのフォローをさせてもらっ。」

「…りょーかい」

正直、信じられなかった。里奈が超能力者で、後3年ほどで自殺すること、未来から阻止する為に来た未来人の話、だが俺にはそれら全てが信じられた。

第3話

翌日。俺は早速明島や他の男子生徒に話しかけられた。

「お前、大野さんに告白されたの!？」

「いや、それ嘘だけど」

「お前やるなあ」

「どんな感じ? やっぱ可愛かった？」

「あーあ、俺も彼女ほしー」

「星河、お前、俺の天使をよくも…」

俺はクラスメートの男子にデマである事を伝え、デマの発信源は明島であることが分かった。

「お前よくもデマを流してくれたな…」

「だってあの状況じゃそう考えるじゃん!」

「おい、ちょっとこっちこい」

「怒るなって! 謝るから! ごめん!」

キンコーンカーンコーン

「では、朝の会を終わります」

学級委員って言うのはかなり辛いと思うんだけどなあ、と俺は思った。勿論、里奈が自ら進んでやったわけじゃないんだが。

明島はすぐ俺に話しかけてきた。

「なあ、俺雪乃さんに告白しようと思うんだけど、いいかな？」

「は？ああ、勝手にすれb…痛い痛い痛い痛い！」

「ちょっと来てほしい」

〈廊下〉

「何だよ、急に。」

「彼女、雪乃さんは内気な性格であるのは知っている？」

「いや、知ってるけど」

「それじゃあ、何故勝手にしろ等と言った？」

「いや、そんな個人の自由なんじゃないかと…」

「…多分彼女はどんなに顔の整っていない生徒の告白も受け入れてしまう。よってあなたはそうなる前にあの男を駆逐するべきです。」

「駆逐って…」

「
…」

「…まあいいや、一応止めとくよ」

「…助かる。すまなかった。」

「いいや、よく考えりやそうだしな、」

〈教室〉

「僕！僕！」

「はい、じゃあ田島君」

「えっと、これはこうだと思います」

「あー、ちょっと違うなあ…」

「えー！何で違うの！どうしてどうして！」

「ほら、席について」

「嫌だー！僕が正しいー！」

またかよ…ハア…

「なあ、アイツ何なんだ？」

「え？アイツ？」

「星河なら何か知ってるんじゃないかと…」

「梶野、寧ろお前こそ知ってる俺は思ってたんだが」

「さーな、ただこのクラスに知的障害者がいるっていうのは聞いてた」

「ほら知ってた。」

「馬鹿言つなよ、俺だってさっき他のクラスの奴から聞いたんだぜ？にしてもあれは重度かね？」

「さあ？でも酷かったら支援学級行ってるだろ」

「その辺良く分かりません」

「梶野でも分かんないのか…」

「ちょっと職員室連れて行くぞ」

「分かりました」

「先生どっか行つた…」

「学活の時間」

「えー、今日田島君は早退した。彼は知的障害者だが、彼を馬鹿にしてはいけない。そういう差別が」

「ということで、田島君の助け等は学級委員の仕事にしようと思う。」

「！？」

「クラスの代表として、内野君と雪乃さんにやってもらおうと思うんだが、反対する人はいるわけないよな？」

「あの…」

「何だ？星河、何か疑問に思うことでも？」

「それは学級委員の仕事では無いと思いますが…」

「…あのなあ、差別は行けないぞ？大体なあ、そもそも…」

話長え…

「内野ってさ、大丈夫かな？雪乃さんも」

「分からん、にしてもウチの担任話わかんねー阿呆だな」

そして放課後。俺は大野に渡したいものがあると言われた。

第4話

「渡したいものがある」

俺は教室でそう言われた。もちろんあの未来関係だとは思うが。

「渡したかったものはこれです。」

「何だこれ…？定規？」

渡されたのは30cmの定規だ。これをどうしろというのか

「それは、通常の定規ではない。」

「へ？」

「未来で特殊生産されている護身用の武器の強化版。」

「はあ…定規が…？」

「気をつける、人間の腕なんて簡単に斬れる。」

「うわっ！こんな渡すなよ…」

「それを持っていれば、あなたは彼女を守れる。」

「つまり、里奈を襲う奴がいたらこの定規で…？」

「他に扱いやすいものがあつたら私に言ってほしい。そうすればま

た作れる。」

「ただ、これどう持てばいいんだ？」

「斬れる部分はこの10cmの部分。ただし刃物では無いので問題ない。」

「これ職質されたらアウトだろ…しかも軽すぎるし、これ本当に大丈夫なのか？」

「素材は10年後で既に開発されている超波動合金製。ダイヤモンドに匹敵する強度と硬度、日本刀には及ばないがそれに非常に近い斬れ味がある。」

「あぶねーな、これ」

「斬れる部分意外でなら殴る用途としても使える。例えばここにあらる岩。」

「ああ、」

「斬れる部分でやってみる」

「どうか」

すると岩はいとも簡単に斬れた。

「ついでに叩け」

すると岩は粉々に砕けた。

「決して悪用はしないでほしい。彼女を守る為のみに使ってほしい」

「分かったよ、とりあえずサンキュー」

（翌日）

例の田島は相変わらず授業妨害を繰り返している。本人はその自覚が無いのだろうが、クラスの中には

「アイツ邪魔」思っている人が少なからずいる。

俺はこんな事を耳にした。

「なあ、A組の翔が雪乃さんに告白するらしいぜ？」

「へー、でも玉砕すると思うけどなー」

「何言ってるんだよお前」

明島と話していたら後ろにいた柊野が首を突っ込んできた。

「A組の早川 翔って早くも数人の女子に告白されてるんだぞ？そりゃあ雪乃さんもあれだろ…」

「あーあ、俺の天使が…」

「へー、で、いつするのかも分かるの？」

「俺、そこまでは知らん」

明島は使えない奴だな、まあ小学校の頃から分かってはいたが。

「何でも今日の放課後って本人自ら言ってるよ?」

「梶野ってよくそんなの知ってるなあ…」

「まあ、情報通で通ってるからな、ただこの早川翔にはあまり良い噂が無い」

「そうなのか?」

「まあ、喫煙してた等の目撃証言から中3の先輩のヤンキーと繋がってるだとか…」

「お前相談部みたいな部活作れよ」

「じゃあお前入ってくれるか?」

「いやー、めんどくさいしなー」

「だよな、それに勉強に打ち込みたいし」

「俺は入るぞ」

「明島なんか役に立ちません。」

「それより、俺はその翔なんかが雪乃さんと付き合えるというのがすごい嫌なんだが、対策とかないか?」

「まあ、彼は見た目は好青年でそういう噂も一部の嫉妬した男子のデマだとかも…」

「
…」

「何で俺の方見るんだよ！だって勘違いするだろ！」

「まあ、素直に負けを認めましょう。」

「そうだな」

「クソッ、余裕そうな顔しやがって」

実際、全然余裕じゃない。これを阻止出来なかったら大野に消されるかもしれない。

とにかく、何とかして対策を考えないと…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3826ba/>

報われないのはお互い様

2012年1月10日21時02分発行